



理事長就任のごあいさつ

理事長 水田 雅博

このたび、松井珍男子大先輩の後を引き継ぎ、朝田教育財団の理事長をお引き受けすることになりました水田雅博です。よろしくお願いたします。

昨年の春、「朝田善之助記念館」竣工の新聞記事を見ながら、静かに喜びを噛み締めておりました。その日から8ヶ月経過した本年1月に松井大先輩から、突然、この度の理事長の話を切り出されました。これまで、財団が主催される行事や研修会には、時々参加をさせて頂く程度でしたので、驚きと言いますか、よもや私が朝田教育財団の理事長になるなど夢にも思わないことでした。そして、副理事長の朝田華美さんからもお話を頂き、もうお引き受けするしかないと決意した次第です。といいますのも、この財団の初代の事務局長として運営の基礎を築かれた朝田善三さんと私は、中学生時代の同級生であり、社会人になってからも様々な連携を図る親友としてずっとお付き合いをした仲だったのです。

善三さんは、御父上の事業を受け継ぐ傍ら、財団設立当初から財団の目的である「部落の青少年などの教育を振興するとともに、部落問題に関する研修、啓発および研究を行

い、もって部落問題の解決に寄与する」(財団設立趣旨) ことに粉骨砕身、大変精力的に活動されていきました。会うたびに財団の話に熱く語っておられたことを思い出します。朝田華美さんのお話を聞いて、そんな彼を思い起こしながら、彼の「志」、「精神」が未来につながるように精一杯努力して参りたいと決意をいたしました。

さて、朝田教育財団は、朝田善之助委員長の生涯の闘いの結晶であります。そして、先の目的にありますように崇高な理念を示しています。この理念を私もしっかりと受け止め、財団の主要事業が奨学事業であることは勿論ですが、そうした奨学事業を通じて「人を育てる」こと、さらに差別のない社会に向けて教育・啓発に取り組むことに全力を傾注いたします。

また、朝田善之助記念館が開設されてちょうど1年という歴史の節目に立ち会わせていただくことができ本当に光栄なことと感じています。記念館には、朝田善之助初代理事長が生前様々な運動を通じて収集された5万点を超える部落問題にかかわる史資料が残されています。私も書庫と1階と2階にある開

架されている図書や史資料等を拝見しました。運動の中で明らかになっていない資料等も多数存在し、歴史的価値のある本当に素晴らしい史資料が保管されています。現在「公開」に向けて鋭意準備中ですが、是非とも一度閲覧していただきたいと存じます。

さらに、記念館には朝田善之助さんの往年の居室がそのままに再現され、ここで部落解放について熱く語られていたであろうお姿に想いを馳せ、「朝田学校」を体感することも出来ます。こうした朝田善之助さんの熱い「魂」を感じつつ、朝田教育財団が差別のない“真に豊かな社会”を実現するために日本の人権問題解決のリーダーシップを発揮できるよう心血を注いで参ります。

一方で、2016年12月に制定施行されました「部落差別の解消の推進に関する法律」は、「部落差別」を具体的な人権問題として取り上げその解消に向けた取り組みを明らかにしました。そして、この法律を受けて兵庫県のたつの市をはじめとして各地で「部落差別の解消の推進に関する条例」の制定も進められています。このように、名称の違いはあるものの我国の人権問題を解決する大きなスタートにもなりました。しかしながら、すでに3年が経過していますが、法律の目指す社会の状況には至っていないのが現状ではないかと思っています。当財団がそうした社会を変える一翼を担えることができればとも考えています。

とは言いましても、松井大先輩をはじめ歴代理事長の方々のように大きな実績もない私であります。第7代目の理事長としての大役を果たすことができるかどうか、大変な恐縮

とともに不安でいっぱいです。京都市役所時代、現場の第一線で働く仲間と一緒に走り回っていたことだけが取り柄の私でございます。皆さん方とともにお力添えをいただきながら、朝田教育財団がいよいよ「真の豊かな社会」、「差別のない社会」に手を繋いでいく、そんな大きな役割を果たす仲間の一人として、役割を果たしたいと存じます。

あらためて、朝田善之助初代理事長の生涯の闘いの結晶、財団創立の崇高な理念を胸に刻み、朝田善三さんが築かれた土台を、基盤を、彼の志を皆さん方にしっかりと繋ぐ、その気持ちだけは強く持ちまして、自らを叱咤激励しながら頑張っ参ります。

皆さん方のお力添えを是非ともよろしくお願ひ申し上げまして、理事長就任のご挨拶とさせていただきます。何卒、よろしくお願ひ申し上げます。

[略歴] みずた まさひろ

1953年12月14日生まれ。立命館大学卒業後、1977年京都市入庁、教育委員会、総合企画局市長公室長、伏見区長、京都市交通政策監、京都市公営企業管理者を歴任。2016年3月退職。

現在、京都ステーションセンター株式会社代表取締役 専務

立命館スポーツフェロー会長

立命館大学体育会

ソフトテニス部 統括監

立命館大学校友会 常任幹事

近畿ソフトテニス連盟 副会長

京都市体育協会 理事

「部落差別に立ち向かって～理事長退任にあたって～ 珍さんの折々の記 公益財団法人 朝田教育財団 松井珍男子」 が発刊されました

6月22日、松井珍男子理事長が退任されました。理事長在任中の2009年3月から2019年3月までの10年間、財団だよりにより理事長挨拶を執筆されてきました。11巻の「理事長就任にあたって」から20回に及ぶ挨拶は、朝田教育財団30周年、水平社創立90周年、戦後70周年の節目、マスコミの部落差別の認識の深化などその折々にふさわしいものを執筆されてきました。

理事長退任にあたって、理事長の巻頭言、松井顧問の財団の諸行事や様々な集会での挨拶原稿も併せて掲載し発刊することといたしました。

それぞれの原稿は、「部落差別に立ち向かって」という表題のように、松井珍男子さんの人生そのものであることに気づかされました。和歌山の被差別部落に生まれ中学校卒業後、印刷工場で働きながら夜間高校を卒業されました。その後、1958年京都に来られ 朝田善之助財団初代理事長の指導を受け、田中支部を拠点とした勤評闘争をはじめ近畿各府県での解放運動に関わりました。立命館大学で学ばれ卒業後、京都市職員として勤められました。最初に勤務した民生局同和係で「京都市同和奨学金」制定に関わり、教育委員会社会教育課では婦人講座の担当として識字学級を千本地区で開設しました。

水平社90周年を迎えての対談では、同和行政の打ち切りの中で隣保館を廃止したことについて、高齢化が進み若者が出て行き年寄りのまちになっている同和地区の現状をふまえて苦言を呈しています。京都市副市長として46年にわたっての勤務を終えられました。

この本では、朝田善之助の死去に際しての追悼の言葉、「おっちゃんとの出会いから別れまで」の中で、『差別と闘いつづけて』を引用されてい

ます。

「おとなは一人も入って
いなかった。ただ一人松井
珍男子という和歌山からき
た部落出身の背の低い大学
生をまぎれこませておい
た。松井は活動家だった

が、一見中学生みたいに見えるから、わからない。かれには『発言するな。見守つとれ』とてあった。松井は、影になって、みごとに子どもの相談役を果たした。」(勤評闘争にふれて)

「己に克つこと。自己にきびしくして、自己のもてる能力を最大限に伸ばす努力せよという言葉は私の脳裏をはなれたことのない重いおっちゃんの教えであります。おっちゃん。さようなら！安らかにお眠り下さい。合掌。1983.4.29」

また、朝田はなさんを偲んでの中で「私にはおばちゃんとの忘れられない思い出があります。それは今から15年前ですが、1999年3月末に京都市収入役に任命されたとき、銀閣寺の京屋におばちゃんをたずねてご挨拶に寄せてもらいました。いつものあの椅子に座っておられたおばちゃんは『松井さん！わてはうれしいんや。あんたがこんな偉い人になってくれて。この新聞切り抜いてここにおいているのや』とって京都新聞3月19日付の新聞を見せてくれました。1958年におばちゃんやおっちゃんにお世話になったときは「中学生のような小さな学生」と見られていました。そんな昔の小生を知るおばちゃんであつたればこそ『わてうれしいんや』とってくれたのだと存じます。」(本を希望される方は、事務局まで申し出ください。)



第37回同和教育研修会 「朝田善之助の人となりを語る」開催される

去る7月5日午後6時30分より京都市こどもみらい館にて朝田善之助記念第37回同和教育研修会が開催されました。参加者約90名。

小山逸夫理事が司会をつとめ、開会后、松井珍男子前理事長（顧問就任）の後任となった水田雅博新理事長から開会の挨拶がありました。

研修講演に先立ち、水平社博物館製作の「全国水平社の活動家たち—部落解放の理論的指導者—朝田善之助」のビデオが上映され、朝田善之助初代理事長の懐かしい映像が流されました。

研修講演の進行役（聞き手）の山本崇記（静岡大学准教授）さんは、本日の語り手5名の方から、朝田委員長との出会い、朝田学校がどういう場だったのか、また部落解放運動の分岐点という3つの柱に沿って思い出をお聞きしたい旨が示されました。私にとって朝田さんは、一度も会ったことのない歴史上の人物ですけれども、みなさんにとっては、朝田さんは「朝田委員長」であり、「おっちゃん」であり、「善ちゃん」という本当に、リアルタイムな思い出をもってのお話をお聞きしたいと進行役を務められました。

（詳細は後日報告書を発刊しますので、お問い合わせください。）

秋定嘉和（池坊短期大学名誉教授、京都部落問題研究資料センター所長）さんは、立命館大学で奈良本辰也先生、林屋辰三郎先生から部落史を学ぶなかで、奈良本先生の家で朝田さんと出会ったこと。私は率直に“運動”は嫌いだけれど、部落の一青年が朝田理論というものを作り上げたのかに関心があった。河上肇さんや大阪市大のグループのマルクス

主義者との繋がりがあったが、朝田さんは、水平運動と融和運動を繋げ、仲良くやっていたこと。組織内の対立では、逡巡するときもあったが、共産党との論争・喧嘩の折には、すっきり割り切れたこと。部落解放運動は、身分闘争で身分を解放しない限り、人権は平等にならないという議論を、朝田さんが提起したことが、日本史の中で、最大の手柄だと、思っているなどについて話をされた。

大賀正行（部落解放同盟中央本部顧問、部落解放・人権研究所名誉理事）さんは、朝田さんとの出会いが小豆島での第1回部落解放青年集会であったこと。その後、北井浩一君に誘われて、上田卓三・西岡智らと「京参り」が始まったこと。朝田さんは、オルガナイザーで、具体的な闘争について、日本酒を回し飲みしながら徹夜で指導された。朝田学校という名前はなかったが、実践し闘って、問題意識が湧いてきた時に、話を入（いれ）るんです。こういう指導手法でした。朝田さんは、「差別は観念ではない。実態の反映」という部落問題の基本的なとらえ方に立って、行政闘争を展開し、大阪だけでなく、部落解放運動全体の発展につながった。内閣同対審「答申」も勝ち取ったということです。部落の生活実態も変容してきている中で、朝田理論をどのように発展継承していくかが今後の課題となっているとの話をされた。

山本栄子（部落解放同盟西三条支部、識字学級に参加）さんは、厳しい生活環境に育ちながら、解放同盟のオルグ隊の話を聞いたところから、目覚めて、解放運動や識字学級に参加するようになったこと。朝田のおっちゃん

んが勉強するんやったら、運動するんやったらウチへ来いと声をかけてくれはったのが、きっかけになった。そんなとき、朝田のおっちゃんが言うてくれたことが、運動するんやったら、まず、字を取り戻せと。文字が必要やと、資料読むのにも、文字がいる。とにかく、それがなかったら、何にもできないということでした。私は、やっぱり教育なんじゃないかなと思いました。難しい話もいろんな関係者と一緒に聞いているだけでもためになった。私は、朝田学校で育ててもらい大きくしてもらった。解放運動はまず、自分が変わることもなだと常に教えてもらったとの話をされた。

高橋のぶ子（崇仁地区で解放運動、地域活動識字学級等に参加）さんは、19歳で崇仁地区に単身来住し結婚した時に地元を舞台としたオールロマンス事件の糾弾闘争があつて、運動に飛び込んだこと。その後、支部の旗開きで朝田委員長に初めて会った。陽気にお酒はよう飲まはるし、みんなとおんなじように踊りはるし、陽気なおっちゃんやなと思っていました。狭山差別裁判の闘争で東京の代々木公園と一緒にバスで行ったことや改良住宅家賃値上げ反対闘争の学習を通して、私も識字教室に行って一生懸命に字を憶えて、字を知らないと物事の判断がつかないことを学んだ。今もって、世間との格差は、何十年経っても埋まっていません。部落がよくなれば、一般社会はもっとよくなっています。歳ですので、運動に充分参加はできませんけれども、やっぱり解放のために頑張らなあかなという気持ちが今もありますとの話をされた。

山崎孝（錦林支部参加後、夜間大学を卒業。小学校教員・校長で退職）さんは、周り



語り手、聞き手の皆さん

から委員長は、厳しい人や怖い人やと聞かされていたけれど、意外と温和という印象を持ちました。朝田委員長から、常に教育を大事にして、大学を出なあかと諭され、24歳で大学に入学しました。僕が運動に参加したときには、青年学習会が月一回開催されていて、社会科学の学習を中心にして、社会的立場の自覚について具体的闘争の場面で指導を受けました。現在財団の役員として奨学生の担当をしているが、若い人を育てることの大切さを痛感しているとも話されました。

その後フロアから、家賃値上げ反対闘争の折、京都市の実態調査では、京都市民と同和地区の世帯収入で、“十萬円の格差”があることについて、朝田委員長は、部落の間は働いても、市民の六割の収入しか得られてこないことが差別の本質なんだと教えられたとの話が紹介された。また、部落の変容については、今も生活実態は厳しいこと、実態調査を踏まえて明らかにする必要があることなどの意見も出された。

最後に、森本弘義理事から、松井前理事長が十年間に書かれた巻頭言などをまとめた『部落差別に立ち向かって～、珍さんの折々の記』を発刊し、今日の研修会資料に同封しているとの紹介がされ、竹口等理事からは、朝田善之助記念館の活用や奨学生の推薦への呼びかけがされ、研修会が閉会した。

奨学生の集い 2018-3 学習会

「奨学生の集い 2018-3 学習会」を2019年2月16日(土)、朝田善之助記念館にて開催し、奨学生、その卒業生、財団役員などが集いました。山本 崇紀財団評議員に、「部落問題を語る試み—若者たちが取り組む新たな語り方の実践を手掛かりに」というテーマでお話いただきました。

司会 (山崎孝評議員) こんにちは。第3回奨学生の集いを始めます。奨学生の皆さんは4名出席してくれています。初めて会う人もいます。

山本先生に無理を言いまして来てもらいました。財団の評議員で静岡大学の先生です。よろしくお祈いします。色んな話を聞きながら出来たらディスカッションしていきたいと思います。山本先生から資料が何点か出ています。レジュメにそって進めていきたいと思います。それでは先生よろしくお祈いします。

部落と在日、若者を比べて

山本 静岡大学の山本と申します。奨学生の皆さんに会うのは初めてです。今日は、私と共に、ゲストとして、金由蘭さん(同志社大学)、辛智陽さん(民族団体専従)にも来て頂いています。在日朝鮮人学生の当事者コミュニティの実践について紹介してもらう予定です。今日の報告タイトルは「部落問題を語る試み—若者たちが取り組む新たな語り方の実践を手掛かりに」としてみました。

私は京都の大学の出身で、16年ぐらい京都にいました。2015年から静岡の大学に移りましたが、長らく部落問題の研究をしていま

す。奨学生の皆さんのように、部落にルーツを持つ若い現役学生さんに出会うことは稀でした。私が大学に入ったのは1999年ですが、その頃には、部落解放研究会など、部落にルーツを持つ学生やそれに連帯する学生の集まりは、既になくなっていました。

一方で、在日朝鮮人学生や他のマイノリティの学生は旺盛に活動していました。それは今日も変わりません。この違いはどこから来るのでしょうか。そんなことが気にかかっています。そういう意味で、若い当事者は、部落ルーツとの距離感をどのように形作っているのか。アイデンティティと言ってもいいかもしれませんね。また、当事者コミュニティとどのように関わっているのか/いないのか。この二つの点が、当事者の若者を見る点で大事だと思っています。皆さんはいかがでしょう。ですので、奨学生の皆さんと在日学生たちとを比べてみると、何かその特徴が見えてくるかもしれません。

インターネットの功罪

最初にAbemaTVというインターネット上で配信された番組を見たいと思います。これは、「“部落”ってナニ？」をテーマに、当事者、特に女性たちが出演した番組です

(2018年11月放映)。インターネット上でのアウトティング(暴き)が横行している現在、顔や名前を出してテレビに出演するというのは非常に勇気のいる行動だと思います。一方で、人権教育が「同和」を抽象的にしか教えてこなかったことを考えると、このように具体性を持った存在から部落問題を正しく学ぶことができるという点で、極めて貴重な語りの実践であったと考えることができます。映像を見て頂くとわかるように、部落問題の基礎知識から、今、部落を生きる女性たちが何を感じ、何に重きを置いているのかがリアルに伝わってきますね。テレビの番組で部落問題が正面から取り上げられることは非常にまれです。しかし、インターネット上には、偏見に満ちた情報が溢れています。若者を中心に、今の人たちは、テレビよりネットの情報にアクセスすることが多いですから、部落に関わる情報として入ってくるものは、非常に歪んだものが多いということですね。極めて深刻な事態です。

さらに深刻なのは、例えば、GoogleやYahoo!などの検索エンジンでエゴサーチ(インターネット上における自分自身の評価を確認すること)をしてみると、自分の出身地や苗字などが差別的、侮蔑的な形で書かれていることに気づいてしまうことがあります。適切な同和教育を受けないまま、自分のルーツと出会ってしまうんです。特に問題なのは、1930年代に実施された「全国部落調査」という図書を、Amazonで販売しようとし、さら

に、インターネット上に情報発信している人物がいることです。そして、多くのネットユーザーがその情報を無自覚に消費してしまっている。かつて、「部落地名総鑑事件」(1975年)というものがありましたが、そのネット版が幾重にもコピー・拡散され、出目を暴くリソースが公になったまま、規制できない状態が続いているのです。現在、この案件は、東京地裁で係争中です。250人近くの原告が裁判に訴えているのですが、被告は、まったく反省するどころか、開き直っています。そして、少なくない人が、彼らの活動を、陰日向に支えているということですね。「爆サイ」や「5ちゃんねる」といったネット掲示板での差別書き込みもまた非常に酷いものがあります。インターネットを常用しない方々にはこの差別被害の深刻さがいまいち伝わらないことが非常にもどかしいし、一般市民の方々に十分な関心をもってもらえないことも非常に残念でなりません。

リアル社会、ネット社会は地続き

次に、「ヘイトスピーチ」という言葉を聞いたことがありますか? 京都でも朝鮮学校の生徒がターゲットになった凄惨な事件がありました(2009年・2010年)。「殺せ」「死ね」「日本から出ていけ」など、その存在を否定する差別的言動をリアルとネットの双方で拡散し、多くの人に差別を扇動する過激な行為です。国際社会でも問題になっています。今、関西では、ヘイトスピーチが頻繁に起こって

おり、在日朝鮮人をはじめ、部落の人たちもターゲットになっています。2016年6月にヘイトスピーチ解消法が成立・施行し、同年12月に部落差別解消推進法が成立・施行しました。先ほどの、部落暴き（アウトティング）も、ヘイトスピーチも、ネット社会の到来とともに深刻化してきた現代的な差別ですが、それに対する国の認識としても、対策が必要だ、というところまで来ているのです。とはいえ、これらはそれぞれ規制法ではありませんので、あくまで理念を示したところに留まっています。

障害者差別については、2016年7月に起きた「相模原事件」を想起することができます。これは典型的なヘイトスピーチ・ヘイトクライム事件であり、大量殺人にまで至った深刻なものでした。世界中では、移民やセクシュアルマイノリティをターゲットにしたヘイトクライム（殺人）が頻繁に起こっており、日本も例外ではなくなっています。リアル社会とネット社会は地続きだと考えるべきでしょう。

マイノリティ、互いの交流

このように差別が厳しくなっている現状の中で、私たちは何ができるのでしょうか。それがまさに顔の見える範囲での交流だと思うのです。特に、マイノリティの若者同士が積極的に交流し、互いを知り、エンパワメントされることを望んでいます。私が静岡に赴任してからは、この点に力を入れてきました。

特に、在日朝鮮人学生と日本人学生の間として「日朝学生青年交流会」というものを2017年から始めています。さらに、「LGBTスピーカー養成講座」という形で、セクシュアルマイノリティとセクシュアルマジョリティ双方が、正しい知識を身につけ、互いの立場を尊重しながら、教育や啓発の担い手になっていくという取組もしています。ここでは、「当事者宣言」のようなものを強いることはせず、当事者であることを言っても、言わなくてもいいし、コミュニティや団体に参加しても、しなくても良い。そういう緩い関係性であることを心がけています。つまり、「セーフティ」な居場所作りですね。

しかし、部落の若者による実践というのは、なかなか、取り組めていないのが正直なところではあります。ですから、奨学生の集いのような場所が極めて重要な訳ですね。そして、今回は在日学生とも交流してもらおうという仕掛けを用意した訳です。

2011年に始まった“Buraku Heritage（遺産）”という取組があります。部落にルーツを持つ若者が、個々人の体験や思いを軸に被差別部落に関わる多様な情報を発信していくことを始めたのです。8年前ですが、東京や大阪に住む30代から50代の男女8人が運営しています。誰かに言われた訳でもなく、自分のタイミングやモチベーションで部落と向き合う。向き合うと言ってもそんな固い感じにはしないところがいいですよ。

さらに、これらの活動は、“ABDARC”

(Anti-Buraku Discrimination Action Resource Center) という活動に発展しています。部落に関わるポジティブな情報を積極的に発信していこうと、当事者、非当事者双方が参加しています。私自身も、このABDARCには参加させて頂いています。東京地裁で進行している「全国部落調査」復刻出版出版事件を契機に設立された緩やかなグループですね。

こういった取組を応援していきたいと思えますし、運動や組織に縛られずに、多様な当事者発信の取組みが無数にできていくことで、リアルとネットの双方で部落問題に対して適切に向き合うことができる場を、私たち自身が作っていく必要があるのではないかなと考えています。

在日朝鮮人学生、当事者としての運動

さて、次は、在日朝鮮人学生たちの当事者運動を紹介して頂きたいと思えます。先ほど、お話ししましたように、部落ルーツの学生が集う機会というのはかつてに比べると非常に少なくなってしまいました。そういう意味では、奨学生の集いは非常に貴重な場です。今日はさらに、在日学生との共通点や違いを一緒に考えてみることで、互いにエンパワメントできればという思いです。それでは、よろしくお願い致します。

辛智陽さん

こんにちは。本日はこのような場を作って

いただきありがとうございます。今から留学同の活動について紹介させていただきたいと思えます。正式名称は、在日本朝鮮留学生同盟（留学同）と言います。

歴史を遡ると、留学同（当時：朝学同）は植民地支配からの解放直後の1945年9月に結成されました。植民地支配期に朝鮮から日本に留学していた在日朝鮮人学生達が中心となり作られたのですが、結成当初は、在日朝鮮人学生たちへの生活支援が主な活動内容だったとされています。植民地支配期の朝鮮人への民族差別は制度上の差別や、賃金差別の形もっており、多くの在日朝鮮人学生が当時、苦学生として生活が苦しい中勉学に励んでいたのですが、それは1945年の解放直後も変わらず、例えば、日本人と同じように配給を受けられない等、不当な差別に起因する生活の困窮が続いていた。このような状況が留学同結成の背景にありました。最初は学生たちに食料や寝床を確保することが喫緊の課題だったそうです。

在日の歴史、アイデンティティを学ぶ

留学同は一番長い歴史をもつ在日朝鮮人団体と言われています。現在では、全国10地方に拠点があり、それぞれの地域で活動している学生がいます。私自身も学生時代に留学同京都で4年間活動を行いました。

留学同には日本の各大学・短大・専門学校で学ぶたくさんの同胞学生（在日朝鮮人学生）が集っており、そこで自身のアイデン

ティティや朝鮮半島の歴史や文化について知り、また同じルーツを持つ同胞学生同士の交流を深めながら共に考え様々なアクションをしています。

最近はそもそも自分自身のルーツについて正確に知っている学生も少なく、「祖父や祖母は韓国人だけれど、私は日本人なんです」という認識の学生が多いですが、民族学校に通ったことのある学生、ずっと日本の学校に通っていた学生など様々な背景を持つ学生達が、留学同を通して新しい出会いをし、学習を通して歴史を知り討論をし、自身と民族について積極的に思索を深めていきます。だいたい週に1回のペースで行っている学習会では主に朝鮮半島や在日朝鮮人の歴史、アイデンティティについて学習し、同胞学生自らが準備し、発表を行い、その後参加者全員で討論を行っていますね。

学習以外にも同胞学生たちとの他にない人間関係を築くため様々な交流企画を行っています。特に夏のキャンプは、全国の留学同の学生が200人以上集まります。そこで、各地の同胞学生たちが準備した朝鮮語-ウリマル（私たちの言葉）スピーチや、朝鮮の打楽器演奏、朝鮮舞踊などの公演を披露したりします。このように地域単位での日頃の活動だけでなく、全国的なつながりもできる場になっています。また、留学同主催で成人式を行い、新成人はチマチョゴリやパジチョゴリを着て参加したりもしますね。このような内々の活動だけではなく、他の日本人学生をはじめ

めとして、教員、一般の方々にも朝鮮半島と日本の歴史と現在、在日朝鮮人の置かれている差別状況を知り、共に行動していきましょうと呼びかけるための講演会や展示会なども行っています。

また、私たちは学生団体ですので、学術研究にも力を入れています。年に1度、朝鮮大学の学生たちと留学同の学生たちが各々の研究論文を発表するイベントがあります。自分の専門分野に特化した学術研究だったり、留学同の活動の過程で芽生えた問題意識を深めるよい機会になっています。

論文執筆の過程で在日朝鮮人1世の方への聞き取り等を行ったりもし、そのような過程を通じて、自分という存在、ルーツに向き合うことにもなります。私たちが、向き合わなければいけないことはなんなのか、自分という存在をどう意識していくのか。こういった学術研究活動もそのような思索へと繋がる大事な契機となります。

留学同では毎年、祖国訪問という名目で朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）を訪問します。朝鮮に住んでいる彼/彼女らがどのような考えをもっているか、生の声を聞いたりしています。私もそうでしたが、日本の報道等によって作られた「北朝鮮」イメージとはほど遠いものであるという印象を持って日本に戻ってきます。私自身と朝鮮とのつながりをしっかりと考え、捉え直す大事な期間になります。

他にも、韓国から来た学生たちとの交流も

定期的に行っています。朝鮮南北が分断している、祖国が分断されているということを意識せざるを得ない状況の中で、朝鮮半島統一について考え共に行動していくために、お互いを知るということが大切だと思います。

民族としての教育の保障を

現在、朝鮮学校は「高校無償化」制度から除外されています。その状況におかしいという声をあげるため、京都では私たち留学同と朝青という青年団体が中心となって、毎週火曜日に四条河原町で朝鮮学校への「高校無償化」適用を求める街頭宣伝をしています。民族教育に対する不当な差別の歴史と現在を日本の方々に広く知ってもらうことが必要です。だからこそ街頭に立ち「在日朝鮮人の民族教育権を保障しろ」というメッセージを伝え続けています。

他には、世論喚起の文化活動の一環として演劇を行ったりもしています。今年（2019年）の演劇は、1919年の三・一独立運動100周年を記念とし、それをテーマに、留学同京都・兵庫・大阪の三地方合同で公演を行いました。過去の留学同の作品には、「沈黙」というタイトルの作品があるのですが、これは1960年代から70年代にかけて、韓国に留学した在日朝鮮人学生たちが逮捕され、拘留された事件を演劇にしたものでした。そのような歴史を演劇を通して知り、当時を想起するきっかけになればいいと同時に、現在も続く差別の根源は何かということについて共に考

え行動していくことを訴えていきたいと思っています。

本日、すべてを細かく説明することはできませんでしたが、様々な活動を通して在日朝鮮人学生たちが学び、考え、様々な課題に取り組んでいる団体だということが分かって頂けたらありがたく思います。

司会 何か質問ありますか。

中尾 僕の兄に好きな人が出来まして、兄が部落出身と言うことを伝えると相手側に反対されまして、結婚をあきらめることになりました。隠すという選択はありません。

山本 そういう話は大学の友だちと話したりするのですか。

中尾 大学の友だちには話しません。地元兵庫県に帰ったときに、同和地区の集まりがあったりしたときに、友だちとそういった話をします。

村岡 どこからが差別なのか、差別用語とかあまり分かりません。当事者の人たちが攻撃的でなくても、怖いというイメージがあるのが残念です。

司会 ありがとうございます。僕がいつも思っているのは、差別とは一体何かと、どうすればいいのかということを中心にしています。

今日は今までと少し違った学習会になりました。山本先生どうもありがとうございました。（拍手）

奨学生の近況 2019年度 前期

就職、第一志望内定

M.M

前期では、卒業論文のテーマ確定と大まかな流れを決めることに集中した。卒業論文のテーマは「現代人の罪意識の低下について」とした。内容については、近年の急激な情報化により、私はその膨大な情報量がはらむ匿名性によって人々の罪意識が低下しているのではないかと考えた。人々は直接的なものより間接的なものほど、罪悪感を感じにくく、それに加えSNS上で集団化してしまうことにより罪意識が低下していると考えている。そしてSNSでは匿名であるから誰もが情報を発信しやすい。しかし私は、匿名であることが問題なのではないと考えている。

SNSが急激に一般化され実名と匿名が入り混じったことがリアルとの境目を曖昧にさせてしまったと考えている。元々は匿名であることが前提だったため、インターネット上では「秩序が無いに等しい」と理解して利用している人が多かった。現在SNSを利用している年齢は圧倒的に2、30代の若者が多い。または、多くの人々がそう理解している。2、30代の若者は教育によりネットリテラシーや、それに関する法律等を学んでいない人がほとんどである。それにより起こる問題は多数あるということは、十分に想像できる。例えば、良かれと思ってブログに歌詞を全文書くこと、人の悪口でヒートアップし嘘を書いてしまったなど、犯罪になりうることを平気でしている人が現実問題としてたくさんいる。しかし、こうした人々が法律で裁かれることはほとんどない。このことから、無知であるが故に罪意識が低下している。それに加え、間接的であること、集団であること

が罪意識を低下させていると考えアンケート調査を行う。アンケート調査後、SNS上での人の動きをある程度パターン化し、対策の提案をできる調査結果になっていることが理想である。

就職活動については、有難いことに第一志望に内定をいただいた。アパレルの総合職のため、社会の流れを把握し、アルバイトも引き続き頑張っていきたい。

(大学 文学部社会学科 4年生)

4年生として 卒業論文に取りかかる

Z.Y

この四月から無事、四回生に進級できた私は、大学卒業必要単位を必修科目以外で残り二単位、つまり一科目自由に選択し受講し単位認定を得れば良いという状態で最後の大学生活を始めることができた。周囲の学生などからよく耳にする、四回生で「楽するため」や「全休日を作りたい」等の理由で三年間、講義を受講してきた訳では無いが、私が気になり受講したいと思う講義を受講し続けた結果、四回生の前期は一科目受講すれば良いという状態から開始できただけなので、周囲の学生から「休み多くていいな」と言われても休みが多くて嬉しいとは特に思わなかった。

一科目受講すればいい良いという周囲から羨まれる状態の私は、気になる講義を三科目受講することにした。前期中にサブカルチャー論、ストリート文化論、生物学を受講することにした。サブカルチャー論は元々、私がアニメや漫画等を視聴しており、初音ミ

クや作品から派生するアイドルなどの所謂オタクカルチャーに興味があり受講を決めた。ストリート文化論は、私はヒップホップミュージックが好きのため受講を決めた。生物学は、私が所属しているサークルの卒業された先輩が「面白い授業」と言っていたため、受講を決めた。本レポートを書いている時点では前期が残り半分以下であるが、私は、この三科目を受講して良かったと思える講義内容であった。

自由選択科目について触れてきたが、必修科目では卒業論文研究を行っている。弊大学の人文学部では四回生が始まった段階で卒業論文の方向性が固まっている学生は少ないという。昨年一年間を通して行ってきた自由テーマでの研究では、取り扱ったテーマが生まれてから十年ほどと歴史が浅く参照できる文献が圧倒的に足りず、結果として単位は認められたが、とても苦勞した。卒業論文ではテーマ変更したがそのことを反省し、今年に入ってから進級するまでに方向性を固め、ある程度の研究と結果の章立てを行い、同じコースの学生と比べても早い時点で担当教諭に認められるものを用意することができた。しかし、まだまだ卒業論文の結果として納得させられるほどの成果物ではないため、ギリギリまでクオリティを高めていこうと思う。

四回生になり所属しているサークルに、これまでほど参加できなくなってきたが、先輩として後輩たちが困っていれば助けたいと思う。私がこれまで身に付けてきた技術などを私が先輩からしていただいたように次の世代へと繋げていきたいと考える

(大学 人文学部 4年生)

自動車の自動運転制御に興味

A.R

三回生の前期も終わりに差し掛かり、前期の忙しい毎日にやっと慣れてきた日々とまたさよならかと、とても厭わしく思います。三回生の前期は、必修の授業だけで一限から五限まである日がほとんどで、授業がない日も登校し課題やレポートをする毎日でした。二回生の後期であった実験の授業は三回生でも引き続きあるのですが、二回生の頃から大幅に内容が専門的になり、内容も濃くなり毎週20枚程度のレポート作成を行っています。授業のコマ数は15コマで、一般の大学三回生よりか大分多くなかなか友人と遊ぶ機会がない状態です。また、私は将来エンジニアになるため大学院の進学を考えています。そのため来年の大学院受験に向け、TOEICや資格そして専門の勉強も始めました。周りに大学院進学を考えている友人はいるのですが、全く同じ進路の友人は居らず全て独学で勉強しなければならず、わからないことだらけで奮闘する毎日です。

また、私の大学ではインターンに行くことが必修になっており、つい先日インターン先が決まり内容の打ち合わせなどがありました。私の行くインターン先は、京都にある精密切削加工の会社で、将来行きたい業界とは少し違うのですがプログラミングに関わるようなインターンの内容なので、自分の興味の幅を広げ、今やりたいことをより具体的に見つけたいと考えています。

今、私の興味があるものは自動車には変わりがないのですが、自動車のエンジンに関わるものではなくAIなどを用いた自動運転などの制御機能系に変わってきています。私の元々やりたい事と言うのは社会の需要に沿ったものではないと、多くの人といろいろな話

をして感じました。今最も需要があり、必要とされているものが自動運転だと思ったのでその分野について情報収集をしているところです。制御系は、学校の授業でも学んでおりその時から少し興味があり、しかも制御系はプログラミングにも関わってくるので、私の興味があるものばかりでこれからの未来に貢献できると希望が持っています。自分の夢や普段の小さな希望を叶えられるように、より努力し自分のしたい事を自由にできる生活を手に入れたいと思います。

三回生になりこの生活で三ヶ月ほど経ち、前まで続けていたアルバイトに行けなくなりいくつかアルバイトも辞めました。その分勉強に励める時間は増えましたがプライベートな時間がなくなり、友人との時間が大切な私にとってとても辛くしんどいタームになりました。次のタームからは研究室配属もあるのでより忙しくなると思います。これも自分の将来のためだと思い努力し続けたいと思います。

(大学 理工学部

機械システム工学科 3年生)

大学生活を通して

N.K

大学に入学し、朝田教育財団の奨学生になって3年目に突入した。私は1年間浪人しているので、地元の友人たちは就職活動を進めており、内定をもらった友人もいれば教員採用試験や公務員試験の勉強をしている友人もいる。私は教員志望であるため、来年の教員採用試験まで約1年しかなく危機感を持って勉強に打ち込んでいかなければいけない。3回生になって大学生活も終盤に差し掛かろうとしている中で、新しい経験をして学んだ

ことを書いていきたい。

まず介護等体験である。小・中学校の教員になるためには、社会福祉施設で5日間、特別支援学校で2日間の実習を行う。社会福祉施設での実習では「朝日の里」という施設でお世話になった。ここは自立した生活を営むことへの困難度が高い自閉症などの利用者さんが多くおられて、利用者さんたちは施設の職員さんに助けをもらいながら内職などを中心に自分自身ができる仕事をされていた。この「朝日の里」での実習で私は「当たり前」や「普通」という言葉を考えるようになった。私たちが普段生活していく中でよく言葉にし耳にする「当たり前」や「普通」という言葉はいったい何を基準としているのだろうか。私たちが「当たり前」にしていることが障害者の人たちは「当たり前」にできないかもしれない。こうした「当たり前」や「普通」といった言葉や周りの人たちが障害という壁を作っているのではないかと私は考えるようになった。

2日間の特別支援学校での実習では、知的障害を持った生徒を担当した。この特別支援学校では卒業後の生徒たちの就業を支援する学校であり、私はここで「なんでも手助けしない」大切さを学んだ。生徒にとって教師は期間限定である。この特別支援学校では3年間で生徒たちは先生の手を離れてしまう。先生は3年で生徒を自立させ、生徒は3年で先生から自立しないといけない。教えることだけではなく生徒を育てることも大切なことだとあらためて気づいた。また、できないことを想定して教えることや、小さなことでもほめてあげることなど、いろいろなことを学ぶことができた。この介護等体験で学んだことは今後に生かしていきたい。

3回生になって3か月が経つが日々学ぶことがたくさんあり、非常に充実していると思

う。1年浪人していることをプラスに考えて、教員試験を受けた友人に情報を聞いたりして来年の教員採用試験の対策を練っていきたい。また、財団でも聞けることがあったら聞いていきたい。

(大学 社会学部現代社会学科 3年生)

中高生に教える中で自ら学ぶ

Z.S

前年度の成績が認められ、無事二回生に進級することができた。二回生からは、基礎科目だけでなく専門科目も加わって一回生の時と比べ、こなさなければならない課題が増えた。なかでも、実験のレポートが多く割合を占めており、提出期限に追われている。実験レポートには、目的、方法、結果、考察をWord使用不可かつ手書きで書かなければならないものがあり、大学の厳しさを実感した。実験は前期で1つの実験を行うのではなく、遺伝子系、分子系、細胞系、環境系の4つの分野を偏りなくそれぞれ7日間かけて行っていく。大学で行われる学生実験は、将来技術者として働くことを念頭において構成されているため、プロトコルを読んで実験を進めていくことが大半である。実験ごとに班のメンバーは変わるが、教員やほかの学生の協力のもと無事にすべての実験を失敗なく終わらせることが出来た。

学外では、時間があるときに青少年活動センターで地域の中高生たちの勉強の手伝いに参加している。そこでは、自分が勉強を教える側ではあるが、私自身も人との交流の重要性を学ぶことができた。たとえば、いきなり初対面の大学生に勉強を見られるのは、緊張や不信感があったりするので軽い会話を重ねたり、普段とは違う話しやすい口調を意識す

ると比較的に交流がスムーズになることがわかった。

学習センターでの教えるという経験は、交流以外に学習に対する姿勢について改めて考えるきっかけとなった。中高生の中には、勉強しに来たもののほとんど手につかず、集中して取り組めない子がいた。そういう時は、誰かに口うるさく「勉強しなさい」と言われても余計にやる気を削がれることだろう。また、学校に通っている以上は勉強が必須であることぐらいきっと本人が一番理解しているだろう。

ではなぜ、分かっているのに勉強に取り組めないのかと私は疑問に思考えた。考えた結果、あるひとつの結論にたどり着いた。勉強は、目標を達成するための一つの手段である。しかし、勉強を拒んでしまう人には、モチベーションとなる明確な目標が無い。そのため、自分は何のために勉強しているのか分からずに勉強を拒んでしまうのだろう。

私も、なぜいま大学で学んでいるのかと考えることがあった。SNSを通せばさまざまな分野で活動し、華々しい結果を収めている人々を見ることが出来る。自分と同じ年齢なのに、既に社会に進出し活躍する人を見ると、どうしようもない焦燥感に駆られ、今の大学での生活を放棄したくなることがあった。しかし、活動センターで勉強に取り組めない子と出会ったことで、私が何のために大学で勉強をするのかを改めて考えることができた。今後も同じように悩むことがあるかもしれないが、今回のことを思い出し、自分の目標のために勉強に励みたいと思った。

以上のことから誰かに教える立場になるということは、自身も常に学ぶ立場にあるということを知ることができた。

(大学 バイオサイエンス学部 2年生)

朝田善之助記念館・付属図書室の紹介 新たな部落問題の専門図書館として

山本 崇記（静岡大学・朝田教育財団評議員）

2018年4月29日、京都市左京区に「朝田善之助記念館・付属図書室」（以下、朝田記念館）が完成した。同年7月17日に正式にオープンした。6万点の資料を所蔵する同館は、リバティ大阪に対する補助金の廃止（2013年）など、近年の状況を鑑みれば、部落問題に関わる大型の資料館が開設されたという点で特筆すべき出来事であったと言える。また、様々に異なる、時に対立する評価やスタンスを惹起する人物である朝田善之助（1902～1983）という「巨人」を、私たちが改めて議論の遡上に乗せ得る機会を提供してくれてもいる点で画期的な出来事であった。この小論では、記念館の性格や意義について、述べてみたいと思う。

設立までの経緯

2018年7月13日、朝田教育財団主催の第36回同和教育研修会が開催され、竹口等常務理事より、設立に至る経緯が紹介された。それによれば、1981年に財団が設立された当初から「部落問題資料館の建設をめざす」とされていたようだ。当初、朝田善之助本人から託された資料は1千点であったようだ。しか

し、朝田善之助が亡くなった後、府市に散らばった資料をトラックで回収し、丹念な資料保存・整理の作業が1984年7月からスタートしている。その結果、資料点数は4万点にまで達し、財団が収集した資料などと併せ6万点にのぼったのである。朝田記念館は、約40年近い時をかけて、一大部落問題資料館として我々の眼前に現れたことになる。

ところで、部落問題研究所（1948年設立）とは別れ、京都部落史研究所（現在の京都部落問題研究資料センター）が設立されたのが1977年であった。部落解放運動の組織的な課題もあり、それぞれが別々の資料館・研究所の設立を目指していったことになる。さらに、（公財）世界人権問題研究センター（1994年設立）が加わり、各所各様の資料収集・整備、そして、研究を進めてきた。そのことの評価をここでするつもりはないが、端的に言えば、各研究機関・資料施設間の連携、ネットワーク、比較研究が非常に重要だということは確かであるだろう。部落問題の総合的な研究を進めるには、それぞれのイデオロギーや歴史的な対立を「乗り越える」必要があるし、既に、一部の歴史学者をはじめ、横断的

に資料探索・分析が行われてきた。その意味でもこれらの研究所や資料館が継続・維持されていることは極めて重要である。特に、部落差別解消推進法が「情報化の進展」による差別が吹き荒れる今、アンチレイシズムの運動や制度的な差別是正のあり様をめぐって、部落問題に関わる専門的な研究・資料機能はますます重要性を増している。

特に、2009年から始められた部落問題研究所主催の北原泰作資料の整理作業には立場を越えた大勢の研究者が参加した。筆者自身、北原をめぐる評価を旺盛に議論できたことを非常に貴重な経験として記憶している。その後、その成果は、『部落問題解決過程の研究』（全5巻）として世に出されたが、その多様な研究者の参画という出来事は十分に記憶・記録されていない。

その点で、朝田記念館の設立は、まさに、最も党派的・イデオロギー的対立・摩擦の発信源のようにも捉えられてきた人物を記念する資料館から、その点を正面から深く掘り下げることができるかどうか。その流れを推し進める重要な契機となり得るものと考えたい。柳原銀行記念資料館、ツラッティ千本も参加する「人権資料・展示全国ネットワーク」への加盟もあり得るだろう。

資料の性格と可能性

朝田記念館に所蔵された資料群への関心事

項として、①朝田善之助の思想・実践・理論の形成に影響を与えたもの、その形成過程、②部落解放運動（中央本部・京都府連）の意思決定過程や組織化の過程、③地元である田中部落の動向、といった点に分けられるだろうか。それぞれが非常に大きなテーマであるが、①については、朝治武の『差別と反逆—平野小剣の生涯』（筑摩書房、2013年）のような大著が新たに朝田善之助論として登場することも十分にあり得るだろう。『新版差別と闘いつづけて』（朝日新聞社、1979年）や『朝田善之助全記録』（全55巻、朝田教育財団、1986～2003年）の再検証も求められるであろう。既に、『差別とアイデンティティ』（阿吽社、2013年）所収の「朝田善之助の全国水平社解消論」を執筆した前川修の作業がその先鞭をつけているが、朝田記念館所蔵資料を活用した本格的な検討が可能になった訳である。

また、関連資料と突き合わせる作業も可能である。現在、京都部落問題研究資料センターに所蔵され、資料整理が中断している駒井昭雄資料がある。駒井宅から部落解放同盟京都府連合会、解放新聞社の手を渡って、資料センターにたどり着いた17箱の段ボールの整理が、2015年2月より開始された。同年12月にはさらに20箱の段ボールが追加されたことで、作業人数の限界も重なり、中断し現在に至る。整理された1200点の資料の性格は、

1960年代から70年代の京都府連の組織問題に関わるものや田中支部に関するものによって構成されている。その点で、上記の②③の論点を追究するにあたって突き合わせたい資料である。さらに、部落問題研究所所蔵の三木一平資料などとも見比べることで、京都における部落解放運動の推移や田中地域の総合的な研究が可能となるのではないだろうか。

朝田善之助の評価をめぐる

朝田善之助という人物をめぐる評価を現代に行うことは非常に難しい。あまりにも多くのことが語られ過ぎ、その多くが典型的な語り口に終始し過ぎているようにも思われるからである。しかし、6万点の関連資料が閲覧可能になった今、私たちは、改めてこの「巨人」とどう対峙するのか、ということが求められている。京都市をはじめとして、同和行政が「廃止」、もしくは、「縮小」されていき、部落解放運動もまたかつての活気を失っているように見える。部落問題研究も、地道な作業が全国各地で続けられているものの、全般的には「下火」であり続けている。しかし、インターネット上のアウトティング（部落暴き）やヘイトスピーチと言った現代の部落差別が露悪的に噴出している現在、改めて、現代の部落解放運動を論じ、実践していくために「対決」しなければならない理論と実践を唱導した朝田善之助の全貌を解き

明かす、最後で最大のピースが同館の設立によって埋まったように思われる。

新たな解放運動の拠点として

朝田記念館について最後に付け加えたいのは、「朝田学校」と言われ、活動家・研究者・文化人・行政職員などが日常的に集い議論を交わした、朝田善之助の自宅の部屋が再現されていることである。朝田記念館では、研修を受けいれてもおり、単なる資料館機能だけではなく、啓発・教育の機能を持ち合わせている。もし、現代の「朝田学校」が存在するとしたら、それはどういった場になるのだろうか。特に、朝田教育財団は部落出身の若者・青年たちのサポートに力を入れてきた。様々な当事者運動にとって「居場所」が重要であることは一目瞭然であるが、部落の当事者が自分たちをエンパワーメントしながら、理論的・実践的に鍛えられる場として同館が生かされることもまた、期待したい。現在、データベースの精緻化や閲覧システムの整備など、より充実した利用に供するための作業が進行形で進められている。多くの方々に訪れて欲しい。

（京都部落問題研究資料センター通信

54号より転載）

新聞記事紹介

去る6月30日、京都新聞8面～10面にわたって、「部落差別に抵抗したまち 崇仁を歩く」との見出しで崇仁地区の現状に関わった記事が掲載されました。これまでの崇仁地区でのまちづくりの現状と課題について取り上げています。崇仁地区のまちづくりの取り組みにとって、心強い応援の記事となっています。その一部を紹介します。

「トンネルを抜けて、東京からの新幹線が京都駅へと減速していく。鴨川を渡ると、車窓から金網に囲まれた空き地と、古い団地が見える。京都は今、観光客であふれ、京都駅周辺はホテル建設ラッシュに沸く。観光地へ急ぐ人たちは通り過ぎてしまうが、京都には部落差別に抵抗した人たちの歴史も刻まれている。部落差別は、地名を明記して地区の現状や未来を語ることさえ、抑圧してきた。京都市立芸術大学の移転や再開発の波にさらされ立ち退きが迫る京都駅前のまちで、出身地を隠すことを強いられてきた人たちに、まちへの思いを聞いた。(京都新聞社・岡本晃明/Yahoo!ニュース 特集・編集部)」 **中略**

「取材を終えて ネット時代の部落差別と
どう向き合うか」

差別の実態を伝えるのに「差別語」や、向けられた罵倒の言葉を記事にしているのかどうか。部落解放運動は戦前からメディアの差別表現を告発してきた。1951年、雑誌の小説が、崇仁地域を含む駅周辺の地名や実名を明記して、暮らしぶりや特定職業などを「暴露小説」と銘打って描写。今のマスメディアは使わない「差別表現」を繰り返し用いた。雑誌名から「オール・ロマンス事件」と呼ばれる。怒りの声は大きなうねりになり、行政責任も糾弾して戦後社会運動の転換点になった。



被差別部落の地名が拡散される恐れは今、高まっている。情報化の進展を踏まえて2016年、「部落差別解消推進法」が制定された。

メディアが被差別部落の地名を特定し報じると、「〇〇さんは部落の人」といった差別を助長し、再生産する恐れがある。逆に報じないと、今もある差別や「同和行政」の負の遺産、同和对策事業終了後の課題が、解決済みの過去として忘れられてしまう。

インターネット上に繰り返される差別的な書き込み。京都駅東部エリアで、新聞紙面に実名で出たことがある人たちからも、こんな胸中を聞いた。

「ネットに写真が出るのは怖い」

「名前を伏せて」

この記事では地名や匿名扱いについて悩み、検討を重ねた。京都駅東部には他府県から移り住んだ人たちも、在日コリアンの人も多く暮らしてきた。同和問題の面だけ語ると、地名に刻まれたさまざまな人の足跡を消し去る危うさも伴う。

1990年前後から崇仁地域では、歴史を語り継ぐ住民運動が立ち上がった。それが被差別部落の歴史を隠さず、藤尾さんたちが誇りを持って語れる土壌となっている。柳原銀行遺構も解体計画から保存運動が守った。以下略
(理事 森本弘義)

評議員会・理事会

朝田教育財団の朝田善之助記念館にて2018年度第3回理事会を2019年3月6日に開催し、議案①「2019年度事業計画」②「2019年度収支予算」③2019年度役員推薦委員会設置④周年事業実施⑤第37回同和教育研修会開催⑥2018年度2回評議員会開催を決議しました。

2018年度2回評議員会を2019年3月23日開催し、議案①「2019年度事業計画」「2019年度収支予算」②2019年度役員推薦委員会設置③周年事業実施④第37回同和教育研修会開催を決議しました。

朝田教育財団18回（2019年度1回）理事会を6月5日に開催し議案①「2018年度事業報告」②「2018年度収支予算」③2019年度奨学生、応募なく新規採用なし④2019年度1回評議員会開催を決議しました。朝田善之助記念館施設設備の整備状況、第37回同和教育研修会の開催状況の報告を受けました。

第14回（2019年度 定時）評議員会を2019年6月22日開催しました。

議案①「2018年度事業報告」「2018年度収支決算」を審議し決議した。

- ② 理事の再任、新任について審議し、水田 雅博氏、山崎 孝氏を新任した。
- ③ 評議員の再任、新任を審議し、古川 平八郎氏、平井 斉己氏を新任した。
- ④ 「顧問規定」第3条にもとづき松井 珍男子氏を顧問に選任した。

次に朝田善之助記念館施設設備の整備状況、②第37回同和教育研修会の開催状況③奨学生の新規採用について同和教育研修会開催状況について報告を受けた。

朝田教育財団19回（2019年度2回）理事会を6月22日開催しました。

同日、松井珍男子理事長退任を受け朝田華美副理事長が議長を務めた。

- ① 理事長の選定について審議し、水田 雅博氏を理事長に互選した。
- ② 朝田 華美氏を副理事長に互選した。
- ③ 理事会の承認を得て水田 雅博理事長が竹口 等常務理事を事務局長に任命した。

公益財団法人 朝田教育財団 Asada Educational Foundation

606-8417 京都市左京区浄土寺西田町 2 番地

Office Address 2 Nishida-cho, Jyodoji, Sakyo-ku, Kyoto 606-8417, Japan

Website URL <http://www.asada.or.jp>

E-mail Address office@asada.or.jp

Phone 075-751-1171

Fax 075-751-1789